



Title	地域住民の外国人との交流・意識とその変化：群馬県大泉町を事例として：第3章 日本人住民と外国人住民の交流実態とそれに対する意識
Author(s)	濱田, 国佑
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 22, 31-57
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22666
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P31-57.pdf



第3章 日本人住民と外国人住民の交流実態とそれに対する意識

第1節 外国人との交流のあり方

大泉町における外国人登録者数は、2004年の段階において、6,472人に達しており、大泉町民全体に占める比率は、15%を超えるまでになっている。これだけの数の外国人が大泉町に居住する中、大泉町の町民たちは、日常的に、周囲の外国人とどのような付き合いをしているのだろうか。

① 近所における外国人との交流

アンケート調査において、近所に住む外国人との交流のあり方について尋ねたところ、「外国人とのつきあいはない」とする回答が最も多く、約4割を占めていた（表3-1）。次に多いのが、「挨拶を交わす程度」という回答であり、この2つで全体の7割以上を占めている。その一方、「会った際に話をする」、あるいは「互いの家を行き来する」という回答は非常に少なく、近所に住む外国人と、日常的に話をするというような関係を持っている町民は、ほとんどいないということがわかる。

表3-1 近所の外国人との交流

	外国人は いない	外国人との つきあいはない	あいさつを かわす程度	会った際に 世間話をする	互いの家 を行き来する	無回答	合 計
2005年	102	222	173	30	8	5	540
	18.9%	41.1%	32.0%	5.6%	1.5%	0.9%	100.0%
1999年	104	241	82	10	4	23	464
	22.4%	51.9%	17.7%	2.2%	0.9%	5.0%	100.0%

では、こうした交流のあり方は、回答者の属性によって、その傾向が異なっているのだろうか。

まず、性別、職業、個人収入・世帯収入別に交流のあり方の違いを調べてみたが、有意な差を見いだすことはできなかった。

ただ、回答者の年齢によって、近所の外国人との交流のあり方には、ある程度の差があることがわかった（表3-2）。年齢が20～30代の場合、近所の外国人と交流がまったくないと答えた人の割合が、48.9%となっているのに対して、60歳以上の場合、その割合は35.1%にまで低下する。逆に、「挨拶をする程度」、あるいは「世間話をする」といった交流があると答えた人の割合は、年齢が上がるほど高くなっている。こうした結果が生じるのは、60代以上の人は、仕事の退職などによって、地域社会での生活時間が長くなっており、それに伴い、外国人との接触の機会が多くなっているからではないかと思われる。以下の事例No. 402では、勤めていた会社を退職した後、平日自由な時間が持てるようになったため、公営プールに通うようになったところ、その利用者のほとんどが外国人であったという経験が語られている。

No. 402

「あの一、今わたしはね、暇だからプールに行くんですよ、夏は。市営のプールに行くんですね。そうすると、ブラジル…系の方が9割、日本人は1割しかいないんですね。」

「あー、そうなんですか。」
「ええ。で、プールのおじさんに聞いてみたら、若い人たちが遊びに行くところがないんだよって。はい。だから、夏場は、ここにみんな集まるんだよって、言っていましたね。」

表3-2 年齢世代×外国人住民との交流

		外国人住民との交流					合計
		外国人は いない	付き合い はない	あいさつを かわす程度	世間話を する	互いの家を 行き来する	
年齢 世代	20・30代	26 19.5%	65 48.9%	35 26.3%	3 2.3%	4 3.0%	133 100.0%
	40・50代	41 18.6%	93 42.3%	71 32.3%	13 5.9%	2 0.9%	220 100.0%
	60代以上	31 17.8%	61 35.1%	66 37.9%	14 8.0%	2 1.1%	174 100.0%
合計		98 18.6%	219 41.6%	172 32.6%	30 5.7%	8 1.5%	527 100.0%

P=.085 (χ²二乗検定)

表3-3 外国人世帯比率×外国人住民との交流

		外国人住民との交流					合計
		外国人は いない	付き合い はない	あいさつを かわす程度	世間話を する	互いの家を 行き来する	
外国 人世帯 比率	10%未満	47 32.4%	59 40.7%	34 23.4%	4 2.8%	1 0.7%	145 100.0%
	10～20%	42 16.0%	109 41.6%	88 33.6%	19 7.3%	4 1.5%	262 100.0%
	20%以上	5 5.2%	38 39.2%	45 46.4%	7 7.2%	2 2.1%	97 100.0%
合計		94 18.7%	206 40.9%	167 33.1%	30 6.0%	7 1.4%	504 100.0%

P<.001 (χ²二乗検定)

一方、20・30代の方は、地域社会に対する参加の度合いが低く、外国人を含めた、隣人との接触の機会そのものが、少ないからではないかと予想することができる。

また、回答者が居住している行政区の外国人比率^(注1)によっても、交流のあり方は異なっている(表3-3)。外国人居住世帯比率が、20%を超えるような行政区に居住している場合、46.4%の人が、日常的に、外国人と「あいさつをかわす程度」の交流があると答えているのに対し、居住世帯比率が10%～20%未満の場合、その割合は、33.6%にまで低下し、外国人居住世帯比率が10%未満の場合に至っては、外国人とあいさつをかわす程度の交流があるのは、23.4%しか存在しないという結果になっている。

また、こうした外国人居住世帯比率が10%未満であるような行政区に住んでいる場合には、「近所に外国人がいない」という回答を選択した人の割合も32.2%に達しており、外国人の存在そのものが認識されていないような場合も多い。このように、面積17.3平方kmという狭い大泉町内においても、居住する外国人についての問題認識のあり方に大きな地域差があることがわかる。

例えば、No. 166は、現在住んでいる地区は、外国人が少ない地域であるということ述べた上で、自身も外国人との交流はないとしている。

(注1) 1997年度現在の、大泉町の、各行政区ごとの外国人世帯比率による。これ以後、各行政区ごとの外国人世帯比率は公表されていないため、本稿では、この数値を用いることにする。

No. 166

(今現在のご自身が交流されている方は?) いません。幸い、何もないもんですから。それで、この地域っていうのが、外国人が少ないんです。悪い言い方しちゃうと、西が多いんですね。西の方が多いです。〇〇からもっと西の方。〇〇の方へ行った〇〇小区域ってよくいうんですけど。あそこが多いですよ。そうすると、こっちは環境がいいところになってるんですよ。だから、外国人が住むには、結構、家賃が高い、新しいから高いんですよ。だからなかなか住めなかったりとか、もし外国の方が住んでもかなり結構きちっとした収入を持ってる方じゃないと、こっちの方の地域に住んでいないんですから、あまりね、この辺はねいないんですよ。一戸建ても多いですし。(こちらに来てから交流はないということですね?) はい、交流はないです。

その一方、No. 446のように、ある程度外国人世帯比率が高い地区に住んでいる場合、お祭りなどでの行事で、外国人とある程度交流をし、なおかつ、そこに参加する外国人の顔も知っているというような事例も存在する。

No. 446

本当の何人かですけど、〇〇でお祭りがあったときなんか出てきてくれて、「一緒に踊ろうよ」とか言って踊ることはありますけどね。

(〇〇でお祭りは毎年ある?) 毎年あるね。町のお祭りの後、お盆に〇〇の納涼祭っていうのがあるんですよ。そのときに外人が何人か出てきて歌うったり踊ったりもするんですよ。みんなそれがブラジルの人なんですけど、顔見知りで挨拶はしますね。でもどういう生活してるのかはわかんないですね。特に行ったり来たりってのはしてないですね。

また、職業柄、外国人との接触の機会が多く、それに伴い、交流も比較的頻繁に行っているNo. 148のような事例も存在する。No. 148は、アパートの大家をしており、毎月の集金などで、居住する外国人とは顔見知りになっており、挨拶をしたり、作業を手伝ってもらったりといった交流は日常的に行っていると述べている。

No. 148

(外国人の方と交流するときはありますか?) …中には親しくして、食事に来いだとか… (笑)、いわれませんがね。そのほかは、あのお家賃を月に一回もってくるとか。はい。あとは銀行振り込みの方とかですから、顔を合わさない人もいますし。あとは、通りすがって挨拶をすとか。ときどき、あそこで草取りやっているんですけど、手伝ってくれる人もいたりね。(そういうことがありますか。) 道行くだけなら、そういうことはないのだろうけど。うちは、居住者の方とはそういうことはありますよ。(じゃあこう、日系の方とは、居住者としてお付き合いをしている?) そうですね。(挨拶をしたりだとか、畑仕事を手伝ってくれたりとか。) はあはあ。そうそう。なんか、公民館でも何か交流があるみたいですがね、そういうのまでは私はでていかないので。

しかしながら、こうした事例は少数にとどまっており、たとえ外国人が数多く居住する地域であっても、外国人との交流はまったくないという状態の人が多数を占めているのは間違いない。No. 45の事例にもあるように、近所のアパートに外国人が住んでいること自体は把握できるものの、誰が住んでいるかはわからず、従って必然的に交流もないというような状態が多くなっているのである。

No. 45

「では、日系ブラジル人の人との交流っていうのはありましたでしょうか？」
「交流…、そうね、やっぱり彼らは彼らの…、うーん、エリアで生活してるからね。まあ、うちなんか、もう、あんまり交流というのはね…。近くに住んでるんだけど、あんまり交流はないですね。」
「アパートの住人が入れ替わると気づきますか、それとも気づかないですか？」
「いやー、全然気づかない。そういう点はね。」
「あー。」
「うん。だから、まあ、入れ替わってもわかんない。あー、外国人が住んでるなっていうのは、わかるんですけど。うーん。」

とはいえ、1999年に行った調査結果と比較すると、交流の程度はある程度増加している（表3-1）。「外国人とのつきあいはない」という人の割合は、1999年には、51.9%と過半数を超えていたのに対して、2005年には、41.1%にまでその割合は低下している。一方、「あいさつをかわす程度」の交流があると答えた人の割合は、17.7%から32.0%に、「会った際に世間話をする」という人の割合は2.2%から5.6%にまで増加している。すなわち、外国人と全く交流がない人の割合は減少する一方、逆に、「挨拶を交わす程度」の交流があると答えた人が以前より増加しているのである。

こうした結果は、大泉町における外国人住民の増加という現状を、少なからず反映していると考えられる。第1章でも述べたように、大泉町における外国人登録者数は、2005年の段階で、約6,500人にのぼっており、全町民に占める外国人比率も15%を超えるような状況である。一方、前回、調査を実施した1999年の外国人登録者数は約5,000人であり、この6年間の間だけでも、外国人登録者数は1,500人ほど増加している。

こうした外国人の増加により、日本人住民と外国人住民との接触の機会は確実に増えているのだと考えることができる。すなわち、大泉町の町民たちにとって、外国人近隣に居住する外国人が、より当たり前の存在として、日本人住民により広く認知されるようになったということである。

②労働・余暇活動などにおける外国人との交流

以上では、近隣の外国人住民との交流のあり方について見てきた。では、職場や、余暇活動などにおいて、どのような外国人と、どのような交流がなされているのだろうか。以下では、各領域における交流のあり方について、それぞれ見ていくことにする。

A. 職場

全有効回答者の中で、「働いていない」という人が21.3%、また、「職場に外国人がいない」という人が25.5%存在している。しかし、1999年調査では、「職場に外国人がいない」という人の割合が44.2%であったことを考えると、職場に外国人がいるという状況がより一般的なものになりつつあるということがわかる。

「職場に外国人がいない」、あるいは「働いていない」人を除いた中で、職場において、外国人と「あいさつ程度」の交流があったのは全体の38.3%、「休憩時間に話しをする」と答えたのは、18.0%であった。ただ、その一方、職場に外国人はいるが、「交流はない」と答えた人の割合も39.5%にのぼっている。

このように、職場に外国人がいるという状況は当たり前になりつつあるものの、その中で、外国

人と交流をする、特に、世間話をする、あるいは、食事をするといった積極的な交流は、未だほとんどなされていないのが現状だと言える。

こうした状況ではあるが、年齢によって、その交流に多少の差は存在している。表3-4は、回答者から「働いていない」、あるいは「職場に外国人はいない」人を除き、それを年齢別に集計したものである。これを見ると、年齢が60代以上の場合、「交流はない」という人の割合が過半数を超えており（51.9%）、他の年代より、その割合が高くなっていることがわかる。また、年齢が20～30代の場合、「休憩時間に話をする」以上の関係を外国人と持っている人の割合が31.1%に達しているのに対して、40～50代の場合は28.6%、60代以上になると、7.4%にまでその割合は低下する。

表3-4 年齢世代×職場での交流

		職場での交流					合計	
		挨拶程度	休憩時間に話す	食事をしたり飲みに行く	家を行き来する	一緒に遊びに行く		交流なし
年齢世代	20・30代	18	13	3	1	2	24	61
		29.5%	21.3%	4.9%	1.6%	3.3%	39.3%	100.0%
	40・50代	45	28	2	1	1	35	112
		40.2%	25.0%	1.8%	0.9%	0.9%	31.3%	100.0%
	60代以上	33	5	0	0	1	42	81
		40.7%	6.2%	0.0%	0.0%	1.2%	51.9%	100.0%
合計		96	46	5	2	4	101	254
		37.8%	18.1%	2.0%	0.8%	1.6%	39.8%	100.0%

P=0.010 (χ^2 二乗検定)

職場における外国人との交流において、こうした年齢による違いが生じる原因としては、年齢が上がるに従って、外国人が主に従事する製造ラインなどでの労働が減り、管理的部門、あるいは補助的部門での労働に替わったということが考えられる。

以下の事例は、ともに60代の男性で、現在は既に退職している人によるものであるが、働いていた当時、外国人とは異なる職種であったため、日常的な交流はなかったと述べている。一方、同じ60代男性でも、No. 73のように、製造現場での労働に従事していた場合には、日常的な会話、あるいは忘年会に誘うなどの交流があったと語られている。

No. 208

「その当時そういった方との交流っていうのは直接には。」

「ああ、ほとんどないですね。」

「廊下で顔を合わせるとか、そういった。」

「いや、だから僕の仕事場っていうのは、そういう人達は来ない所ですからね。」

「別の場所に。」

「うん、だからどう言ったらいいのだろうか。あの事務棟とでも言ったらいいのかな。事務棟と生産ラインとでも言ったらいいのですかね。そういう人達は生産ラインの方にいますから。」

No. 361

「私はいろいろ現場も経験して、最後は広報の仕事をしていました。」

「そうですか。その当時はいっしょに働くということはなかったですか。」

「なかったです。まあ、最近でも半導体では、なかなか外国人は使わないですね。」

「ああ、なるほど。精密な感じの仕事ですからね…」
「ええ、まず現場では使っていないです。エンジニアとして開発・設計のほうにまあ、何人かって感じですね。」

No. 73

「業務上での接点はありましたか？」
「同じそのなんていうの、仕事やってて…日本人の相方というか相棒になった。俺らのところは鉄鋼だけれども、鉄板をある寸法に切ったりなんかするんだよね。」
「あ、あの機械をつかってがっしゃーんって切るところですね。」
「そうそう。そういうところの下働きっていうか。」
「ま、いわゆる単純労働になるんですね。」
「そうそう。」
「じゃ、そういう方々ともお仕事の中で話したり、と…」
「そうそう、まあ会話して…」
「そのころ、職場ですとか、終わったあとに飲みに行くといった形で、ブラジルの方と交流をもたれたという覚えはありますか？」
「なんか…忘年会とかそういうときにブラジルの人も来て…というか呼ぶわけだよ。で会話したりしたわけだよ。でまあ、日本語も向こう話すから。」
「ほんとにお酒飲み交わしながら話ができたと…」
「そうだね。忘年会とかそういうときね。」

B. スポーツ、文化活動、国際交流活動など

趣味、スポーツ、文化活動などにおいても、1999年と比べると、外国人との接触頻度はある程度高まっていると言える。1999年の調査では、趣味・スポーツや文化活動において、外国人と交流があると答えたのは、全体のわずか6.0%だったのに対し、2005年の調査では、「あいさつ程度」の交流があるとした人は全体の19.4%、「休憩時間に話をする」人も5.4%存在している。

しかしながら、こうした活動を超えた付き合いということになると、「活動のあと食事をしたり飲みに行く」人の割合はわずか1.2%、「休日一緒に遊びに行く」人に至っては、全体の0.8%しか存在しない。確かに、外国人との接触の機会は増加し、「あいさつ程度」とはいえ、日本人と外国人が声を交わすという場面は増えているが、やはり、こうした趣味・スポーツや文化活動においても、それ以上の付き合いに関しては、ほとんど存在していないのが現状であると言える。

また、町や国際交流協会が実施する諸活動も、アンケート調査の結果からは、それほど多くの人に利用されているわけではないということがうかがえる。こうした国際交流活動において、「休憩時間に話をする」、「活動のあと食事をしたり飲みに行く」、「互いの家を行き来する」といった交流があると答えたのは、合わせて3.5%しか存在しない。以下の事例にもあるように、多くの町民にとって、こうした国際交流活動は、関係の無いものとして捉えられており、積極的に交流を図ろうとする人は極めて少ないということがうかがえる。

No. 403

「ブラジル人が増えてきた当時ですけども、話したりだとか、交流の機会はありましたか。」
「それは行政でもそうだし、日本とブラジル協会みたいので、年2回くらいは交流会というのをつくっていると思うのですよ、大泉では。だから、そこではブラジル料理だとか言葉だとか、その交流をしたいということで、やっていると思うのですが。どうかなあ、いつも官報なんかでそれを見るのですが、やはり町民として関心のない人達の方が多いのかな。わざわざそこまで足を運ぼうとは思

います。だから関係のある人達は行くけど、そういう印象は持っています。」

「関係ある人というと、商工会議所の人とか。」

「(そういう人)とか、それから自分のところで雇用している人達だとか、一緒に働いている仲間達だとか。」

「ご自身は、そういう機会は？」

「ないです。」

③商店などにおける外国人との交流

それでは、各種商店など、町中における外国人との交流は存在しているのだろうか。まず、ブラジル人が経営する商店等の利用状況を調べてみたところ、以下の表3-5のような結果であった。

表3-5 ブラジル人が経営する商店の利用状況

	利用経験あり	利用経験なし	無回答	合計
レストラン	118	401	21	540
	21.9%	74.3%	3.9%	100.0%
食材店	60	445	35	540
	11.1%	82.4%	6.5%	100.0%
雑貨店	40	463	37	540
	7.4%	85.7%	6.9%	100.0%

これによると、ブラジル人が経営するレストランの利用経験があるのは21.9%、食材店が11.1%、雑貨店が7.4%という結果となっている。

この中で、レストランの利用状況については、年齢による差が見られる。年齢が20～30代の場合、レストランを利用したことがあると答えた人の割合は32.6%であるのに対して、40～50代の場合、その割合は18.4%、60代以上の場合でも、レストランを利用したことがあるのは21.0%にとどまっている(表3-6)。

表3-6 年齢世代×レストラン利用経験

		ブラジルレストランの利用		合計
		経験あり	経験なし	
年齢世代	20・30代	43	89	132
		32.6%	67.4%	100.0%
	40・50代	40	177	217
		18.4%	81.6%	100.0%
	60代以上	34	128	162
		21.0%	79.0%	100.0%
合計		117	394	511
		22.9%	77.1%	100.0%

P=.007 (χ²二乗検定)

先に述べたように、近所における外国人との交流については、20～30代がもっとも少ないという傾向が存在していた。しかしながら、それは、必ずしも外国人や外国文化に対して否定的であったり、無関心であったりということによるものではなく、外国人や外国文化に対して、ある程度の興

味関心を持っているということを、こうした結果は示していると言える。

ただ、やはり、こうしたブラジル人が経営する商店等を利用するのは少数派であり、日常的な交流と言った場合、日本人が経営し、主に利用する店に、ブラジル人がやってくるというケースが多いようである。以下の事例No. 443, No. 166では、日頃良く利用するスーパーに、外国人が買い物に来ているということが述べられている。しかし、No. 443は、外国人が買い物に来ることを否定的には捉えておらず、むしろそのことで町が活性化しているとの感想を持っている。

No. 443

「いまはほとんどね。スーパーなんかもね」

「〇〇屋さんなんかすごいですよ。外人で。買い物で。この辺の人でも嫌がる人いますけど、そんなことないですよ。いるからいいんですよ。いなかったらひっそりとしてますよ。町並み見て寂しいですよ」

No. 166

あそこのブラジルショップっていう食品（店）があるでしょ。（ブラジリアンプラザですよ？）そうそう。高いんですって。だから、あそこなんかで買わないって。だから、日本の食材を買って、それをブラジル仕立てにするんですって。それが一番賢いやり方だって。それを来た人に、次から次に来るじゃないですか。みんな教えていくんですって。あそこなんかで買えやしないって。（どこが主に利用されているんですか？）各スーパーです。スーパーのね、やっぱり安いところで、一番ね、外国人が多いと思うのはね、「〇〇スーパー」とか西じゃないですか。「〇〇スーパー」とか、「〇〇マート」。あのあたりは多いです。必ずいます。スーパーにいけば、必ず一人はいます。

以上、大泉町における日本人住民と外国人住民との交流の実態を、日本人住民に対するアンケート調査の結果に基づきながら、明らかにしてきた。その結果、日常生活において、外国人と接触する機会は、確実に増加しているということがわかった。それは、家の近所などの地域社会生活の場面においても当てはまるし、また、職場などの労働生活の場面においてもそうである。

こうした接触の機会には、年齢による差が見られた。家の近所などにおける接触の機会については、年齢が高いほど、その機会が多くなっている一方、職場での接触においては、逆に、年齢が若い方が、より多くの接触、あるいは交流の機会を持っている。こうした結果は、ある意味で当然だと言える。なぜなら、年齢が低い人の方が、職場において、製造ラインなどの現業労働に従事する場合が多く、必然的に外国人との接触も多くなるからである。

ただ、このように、外国人と日本人の接触の機会は増えているものの、それは、積極的な交流にまでは至ってはいない。増加しているのは、主に、「あいさつ程度」の交流をする人であり、世間話をしたり、食事に行ったりする、外国人と「友だち」関係にあるような場合はほとんど存在しない。

こうした状況の中、近所において、特に60代以上の人たちが、「あいさつ程度」の交流を多く持っているというのはどのような意味を持ってくるのだろうか。接触の機会が多いが故に、逆に、問題を抱えているということも予想される。そこで、以下では、聞き取り調査の結果に基づき、外国人との間に発生したトラブルの内容を検討してみることにする。

第2節 外国人との間で生じるトラブル

外国人とのトラブルの増加は、多くの大泉町民にとって、現実的、かつ切実な問題として認識されている。実際、日々の生活の中でのトラブルの実態とその解決を訴える声も多い。

しかし、その一方で、様々な「トラブル」と、そこに登場する「外国人」が、言説として、一人歩きをしているという例も少なくない。そこで、以下では、聞き取り調査のデータから、外国人とのトラブルに関する住民の語りを、その問題内容ごとに抽出し、言説のあり方と、その背景にある問題について、検討を加えることにする。

①ゴミ出し問題

外国人と日常的に接する中で、もっとも大きな問題となるのが、「ゴミ出し」の問題である。「ゴミ出し」は、夜遅くまで工場勤務することが多いブラジル人たちと、日本人住民が、日常的に顔を合わせる数少ない機会の一つとなっている。そのため、住民の語りも日々の実体験をもとにしたものが多い。

事例No. 45では、自らが管理するゴミ収集所に関しては、鍵がかかっているステーションの外に、分別していないゴミを放置していくなど、マナーを守らない人がいるせいで、掃除など管理が大変になっているとの経験が語られている。一方、管理をする人がいない収集場では、特にマナーが悪く、散らかった状態のままであるということが指摘される。この事例では、美観の悪さと、管理の大変さが、ゴミ出しに関する問題として認識されている。

No. 45

「うん。交通事故に、治安に、あとは、一番トラブルが…、ゴミ出し。」

「あー。」

「うん。ゴミステーションに…、こう、ポルトガル語が全部書いてあるんですけど…。」

「書いてあっても…。」

「うん、守らないんですね。」

「あ、そうなんですか。」

「はー、はー、はー。ゴミ出し…、この近くのゴミ出しのマナーなんかは、今、どういう感じですか。」

「えーとね、あの、外国人がいっぱい住んでる、近くの…ステーションですよ、そして、管理の…する人がいない場所。そういうところは、特にひどいですね。そして、ゴミ入れる、網でつくった、こう、ボックスがあるんですけど、大きいのがね。だけど、それは、みんな、近くの人が、あの一、隣組の人が何軒っていうので、そういうので、管理してるんですけど、鍵がかかっているのを、鍵の外へ置いてっちゃうんですね、みんな。」

「ふーん。」

「だから、ステーション、指定の日以外は出さないようにって、まあ、書いてあるんですけど…。だけど、まあ、所かまわず。で、分別はしてない。」

「あー、なるほど。外国人専用のゴミ収集所をつくって、管理を分けてるっていう所もあると聞いたんですけど、こちらは…?」

「そうですね、あの一、この辺はね、アパートはね、すぐ前のアパートは、その専用のゴミステーションがあるんですよ。うん。だけど…、すごい、散らかしやうでね。」

上記の事例でも語られているように、大泉町では、行政区によっては、各アパートごとにゴミ収集所を設け、その住民が、独自にゴミ収集所を管理するような方式を採用している地域が存在する。賃貸アパートの中には、アパート一棟全てが、人材派遣業者に借り上げられ、外国人住民のみが入

居している場合も少なくないため、そうしたアパートのゴミ収集所は、必然的に外国人専用のゴミ収集所となる。

ただ、No. 359の事例にあるように、不動産会社に管理を丸投げにしている場合が多く、ゴミ収集に関するルールなどが、ブラジル人の住民にうまく伝わらず、結果的にゴミ収集所の管理が全くされないということも起こりうる状態にある。

No. 359

「そういう風な環境があるから、ここではゴミ問題でゴミステーションは外国人と日本人とは別ですよ。」
「別にしているわけですね。その外国人が捨てるゴミステーションの管理というのは、誰がしているのですか。」

「そのブラジル人の中に、例えば指導的役割はそのこのアパートの管理人に責任を持ってもらうように話してあります。」

「その管理人の方というのはブラジル人の方ですか。」

「今は管理人というとはほとんどが不動産屋ですよ。一応形式だけで、それは通じていないですよ。そのアパートのブラジル人ならブラジル人の誰かわかる人に話してあると思いますけれど。このA区に関してブラジル人は区民としての区費も払っていませんから。」

こうした問題は、たしかに、ブラジル人のマナー、モラルに関連する問題ではあるが、同時に、行政や制度の問題でもある。しかしながら、住民たちにとって、こうした問題は、何よりもまず、外国人（ブラジル人）の問題として認識されるのである。

その一方、同じくゴミ収集場の管理を日頃行っている別の人は、全く異なった印象を持っている。No. 402は、マナーが悪いのは逆に日本人の方であり、ブラジル人は、ゴミを捨てる際も、挨拶をして捨てていくと述べている。また、ゴミの中の資料を見る限りにおいては、マナーを守らないで出されているゴミは、日本語のものが多という印象を持っている。No. 402にとって、こうした状況は、意外なものであり、驚きを持って受け止められている。

No. 402

「それから、ゴミを捨てに来る外人の人も、必ず、『すみません』って言って、捨てていくんですね。日本人は、ポーンと捨てちゃいますからね。だから、そういう意味では、わたしは今、ゴミの収集所で整理をしていて、日本人の方がマナーがないなあと、思ってます。正直ね。」

「はい、なるほど。」

「ええ。意外とね、外人さんっていうか、その、ブラジルの人たちは、ありますよね。」

「まあ、わたしが居ない所で捨てていくのはわかりませんが、日本人なのか、外人なのかわかりませんが、少なくとも、わたしが、お掃除をしているときに、通ったり、持ってきたりするの、外人の方が、マナーがあるんですよ。これにはちょっと、今、びっくりなんですけどね。」

「うーん。」

「だけど、一般的に言うとな、相乗効果で良くなっているかって言ったら、相乗効果で悪くなってるんじゃないかなって。その、日本人がね、外人がどうせ、ゴミをばーっと捨てるよと、だから、俺も捨てたってわかりやしないうところがね、絶対あると思うね。」

「あー。」

「はい。日本人には、そういうところがありますよ。どっちかって言うとな。」

「はい。わかります。」

「で、それで、結論は外人のせいにするっていうのが、本当じゃないかなと思いますね。ゴミの中の資料みて、わかるんですよ。やっぱりポーンと投げてあるやつは、日本人の方が多いですもんね。」

「うーん。」

「まあ、みんなじゃないと思いますけどね、大体そうなんです。その、わたしのゴミ収集所は、ちょ

うど網があって、入れ物があるんですね。だから、燃えるゴミはそこに入れることになってるんですよ。ところが、その横に、ポンポンポン捨ててるんですね。もちろん、外人のやつもありますよ、あの、ブラジル語の分もあるんですけど、日本人の方が多いねー、どう見ても。」

「うーん。」

「必ず、だってほら、どこで聞いても、外人が増えたから、悪くなったっていう話しか聞かないですよね。」

「そうですね。」

「じゃあ、ほんとかなって思いながら、ゴミを見てるとね、そんなことはないね。」

「うーん。」

「その、不法投棄なんかも日本人ですよ。よそから持ってきて、ポーンと捨ててっちゃいますからね。」

上記のような、ブラジル人のゴミ出しに関する個人の体験、および印象が語られる一方で、ブラジル人のゴミ問題に関する、言説がそれ自身として、流通しているような様子も見受けられる。

例えば、こうしたゴミ問題に関しても、友人や知り合いなどからの伝聞によるものが、少なからず含まれている。No. 73の事例では、友人から聞いた話として、ゴミが出しっぱなしになっている、あるいは分別しないということを語っている。

No. 73

「うーん。まあ向こうの方、〇〇の向こうのほうのトモダチが、公民館の役員やったときに、向こうの人も全部あつまると。ゴミ出しのアレがいいかげんだとかね。」

「でもこの周りでは…?」

「まあ目立たないわ。わかんないが。」

「まだ、ちょっとねー。ゴミなんかのでも、けっこうね、ゴミ出しっぱなしだとかあるしね。分別しない、だとか…」

「収集日以外の日に出してあるとか。で、カラスが食べちゃって汚くなるとか。まあそういうのだとか。収集日以外にけっこう出しちゃうんだよね。」

また、No. 400の事例では、地区の衛生委員から聞いた話として、コーラ飲料の缶やボトルで、そのゴミが、ブラジル人が出したものであることがわかるということが語られている。また、同様に、No. 318の事例でも、コーラ飲料の缶が、日本のものとは違うため、ブラジル人だとわかると述べられている。このように、「トラブル」の内容には、類似性が見られることも多い。

No. 400

「じゃあ、ご自身のご経験とは別にして、これまで、お住まいの地域の近隣の方とかで、外人の方との間でトラブルに巻き込まれたりというような話を聞かれたことは?」

「聞いたことはありますよ。やはり、ゴミ出しの問題。ゴミをね、いわゆる、全国的にそうですけども、分別収集ですよ。環境に配慮して、リサイクルしようっていうことで。大泉町もそういうふうになっているわけですよ。それで、一般のゴミのなかへね、ジュースの空き缶なんか入れたりだとかして平気で出したりすると。じゃ、なぜそれが外国人かと。飲み物が違うんですよ。コーラでもないものは、わかるわけですよ、一発で。だから、あれは外国の人だっていう。」

「そのジュースの空き缶とかで。」

「到底、日本に住んでいる人じゃ、こういう飲み物はたぶん飲まねえだろうとか、こういう食べ物は食べねえだろうっていう袋がね、入っているわけですよ。それで、地域の衛生委員の人が、中身を見るわけですよ。見ても、結局は、前はそういうものが入っていると『これは違反ですよ』って、その家へ持って行くわけですよ。」

「本人が特定できる場合には、その方のところへ行って、注意をすると。」

「そうですね。だから、特定できない場合は、このゴミはルール違反ですよって、シールを貼っている

でしょ。シール貼って、1週間や2週間、そこへ置きっぱなしなんです。なかは生ゴミだから、すごい異臭がするんですよ。だから、うちのところは月・木なんだけれど、だから月曜日に出されれば、木曜日まで置きっぱなしですよ。夏なんか困っちゃいますよね。」

「結局、そういうのはまあ、衛生委員の方とかが片づけるというわけですか？」

「そうそう。そこで、中身を引っ張り出して、分別しなくちゃならないんですよ。大変だと思いますよ。」

No. 318

「あの、よくなんかね、ペットボトルなんかまで普通のゴミと一緒に出しちゃっているんで、ゴミ置き場なんかにはぜんぶポルトガル語の表示なんかがあって、町がしたらしいんですけど。減らないんですよ。コーラの種類が違うから、すぐわかるんですよ。向こうとラベルが違うから。なんかね、コカコーラじゃないんですよ。なんかね、特殊なのですよ。『日本人じゃないな』と。」

「ゴミ問題で、ゴミの分別ができないとか。このあたりはそんなに酷くないんですか？」

「そうですね。ここに来る人は、うちの目の前なんですけど、うちとは違う区の管轄になるんですよ。ウチは3丁目なんですけど、この通りから向こうが2丁目になるんですよ。ウチはB区なんですけどむこうはC区で、違うんですよ。ゴミで、火・金で持って行っちゃった後は、たぶん区長さんだと思うんですけど、来て掃除して。当番でやっているのかもしれないけど。やったりはしているんですよ。」

「そんなに害はない、という程度……」

「そうですね。」

もちろん、これだけで、軽率に判断することは出来ないが、大泉の人々のゴミ問題の認識の中には、人から伝え聞いたものが少なからず含まれており、そうした状況が、「問題」を増幅させている可能性があると言うことは念頭に置いておくべきであろう。

以上の事例では、ゴミ問題が共時的なものとして、すなわち現在の時点における問題として、それぞれ語られているが、時間的な経過という観点から語られた事例も存在する。

No. 403の事例では、以前より、ブラジル人のマナーが良くなったということが述べられている。行政や、地域の人たちの働きかけなどにより、ブラジル人の人たちにルールを守ってもらえるようになり、ゴミ出しに関する苦情は、以前ほど、聞かなくなったとしている。ただ、こうした背景には、ブラジル人のマナーの向上と、もう一方では、日本人の側の「慣れ」の問題もあるのではないかと指摘している。

No. 403

「ゴミの情報とかは伝わっているのでしょうかね、その方には。」

「だから、何曜日と何曜日以外は出さないでくれと。一時は区費も払わないのだからゴミも出さないでくれというような、地区的にはそういうあれがあったらしいんですけど、最近は仕方ないというのが一つと、それとブラジルの方が、マナーが良くなったということ。」

「マナーが良くなった。」

「ゴミ出しなんかの関係は、要するに意外とルールを守ってくれるようになったのです。その時に申し出てくれるようになったのではないですかね。」

「その良くなったというのは、どういうところに原因が。情報が行き渡るようになったということですかね。」

「それもあると思います。行政の指導というか通知と、あとは隣組の説得というのか、こういう時は出さないで下さいとか、そういう話があったと思うのです。」

「それは、このD区で、ゴミ出しが前よりは良くなっているということですか。」

「ここばかりではないですね。」

「大泉町全部で。」

「全体的には言えるのではないですかね。以前ほど、そういう苦情は聞かなくなりました。」

「ああそうですか。」

「ちゃんとやっている人は、分別もちゃんとやってくれているんですよ。」

No. 162

「ゴミ問題とか、先ほども話に出た騒音問題なんてのは、直接聞いたことは。」

「直接は聞いてない。ゴミがたまにあるようなことを、〇〇というところがあって、そこにあるみたいなんですよ。〇〇と、ここをちょっと行ったところで。で、最近はよく守られるようになってきた方じゃないですか。」

最後に、ブラジル人、日本人に限らず、ゴミ問題は、特に存在していないという認識を持つ人の事例を紹介する。No. 443の事例では、大泉町のゴミ収集に関する規則は、他の自治体に比べて非常に緩く、「分けしなくても全部持って行っちゃう」と述べ、ゴミに関する問題は発生していないという認識を持っている。

No. 443

「この辺はゴミとかは、だいぶ問題とかあるんですか？商店街とかありますけど」

「そうでもないです」

「だいぶよくなってるんですか？」

「そんな。なんでも持っていくから、大泉は。危険物を分けしなくても全部もって行っちゃうから。あのねえ、ここも規則はあるんですよ。でも役場の従業員がやってるわけじゃないから。委託されてやってるから。そんなめんどくさいことしないでしょ。だから全部もって行っちゃう。楽ですよ、大泉は。こんな楽な町はないって言ってますよ」

No. 14

「私のところは、そういうことは全然聞いていません。何か、(地域によっては)あるっていう話は聞いていますけど、ここはないです。」

上記の事例の対象者 (No. 14) は、大泉町の中でも、外国人が少ない地域に住んでおり、このような、印象や認識は、もちろん大泉町全般について、当てはまるとは言えないだろう。しかしながら、大泉町の「ゴミ問題」を考える際、それは、これだけ多様な認識の上に成り立っているものだということは、注目すべき事柄であると言えるだろう。

表3-7 ゴミに関するトラブル

NO	年齢 性別	外国人 比率	インタビュー回答
14	60代 男性	10%未満	私のところは、そういうことは全然聞いていません。何か、(地域によっては) あるっていう話は聞いていますが、ここはないです。
45	60代 男性	20%以上	外国人がいっぱい住んでる、近くのステーションですよ、そして、管理のする人がいない場所。そういうところは、特にひどいですね。ゴミ入れる、網でつくったボックスがあるんですけど、大きいのがね。だけど、それは、みんな、近くの人が、隣組の人が何軒っていうので、そういうので、管理してるんですけど、鍵がかかっているのを、鍵の外へ置いてっちゃうんですね、みんな。
73	60代 男性	10%未満	うーん。まあ向こうの方、西小泉の向こうのほうのトモダチが、公民館の役員やったときに、向こうの人も全部あつまるんで。ゴミ出しのアレがいいかげんだとかね。(この周りでは) まあ目立たないわ
162	50代 男性	10%未満	直接は聞いてない。ゴミがたまにあるようなことを、〇〇というところがあって、そこにあるみたいなんです。〇〇と、ここをちょっと行ったところで。で、最近はよく守られるようになってきた方じゃないですか。
318	30代 女性	10%未満	(このあたりはそんなに酷くないんですか。) そうですね。ここに来る人は、うちの目の前なんですけど、うちとは違う区の管轄になるんですよ。ウチは3丁目なんですけど、この通りから向こうが2丁目になるんですよ。ウチはB区なんですけど、この通りはC区で、違うんですよ。ゴミで、火・金で持って行っちゃった後は、たぶん区長さんだと思うんですけど、来て掃除して。当番でやっているのかもしれないけど。やっぱりはしているんですよ。
359	70代 男性	10~20%	ここではゴミ問題でゴミステーションは外国人と日本人とは別ですよ。(別にしてはいるわけですね。その外国人が捨てるゴミステーションの管理というのは、誰がしているのですか。) そのブラジル人の中に、例えば指導的役割はそのアパートの管理人に責任を持ってもらうように話してあります。(その管理人の方というのはブラジル人の方ですか。) 今は管理人というほとんどが不動産屋ですよ。一応形式だけで、それは通じていないですよ。
400	50代 男性	10~20%	聞いたことはありますよ。やはり、ゴミ出しの問題。ゴミをね、いわゆる、全国的にそうですけども、分別収集ですよ。環境に配慮して、リサイクルしようっていうことで。大泉町もそういうふうになっているわけですよ。それで、一般のゴミのなかへね、ジュースの空き缶なんか入れたりだとかして平気で出したりすると。じゃ、なぜそれが外国人かと。飲み物が違うんですよ。コーラでもないものは、わかるわけですよ、一発で。だから、あれは外国の人だっていう。
402	70代 男性	20%以上	ゴミを捨てに来る外人の人も、必ず、「すみません」って言って、捨てていくんですね。日本人は、ポーンと捨てちゃいますからね。だから、そういう意味では、わたしは今、ゴミの収集所で整理をしていて、日本人の方がマナーがないなあと思ってます、正直ね。意外とね、外人さんっていうか、その、ブラジルの人たちは、ありますよね。
403	60代 男性	10~20%	ゴミ出しなんかの関係は、要するに意外とルールを守ってくれるようになったのです。その時に出してくれるようになったのではないですかね。(情報が行き渡るようになったということですかね。) それもあると思います。行政の指導というか通知と、あとは隣組の説得というのか、こういう時は出さないで下さいとか、そういう話があったと思うのです。
443	40代 男性	20%以上	そんな。なんでも持っていくから、大泉は。危険物を区分けしなくても全部もって行っちゃうから。あのねえ、ここも規則はあるんですよ。でも役場の従業員がやってるわけじゃないから。委託されてやってるから。そんなめんどくさいことしないでしょ。だから全部もって行っちゃう。楽ですよ、大泉は。こんな楽な町はないって言ってますよ。

②騒音問題

大泉町における、日本人住民とブラジル人住民との間のトラブルとしては、「騒音」に関連するものも少なくない。代表的なものとしては、休日や夜に行われるバーベキューパーティーに多くの人が集まるため、その音がうるさいというもの、ステレオなどから流れてくる音楽のボリュームが大きすぎるといふもの、あるいは、自動車が改造してあるため、車が通るたびに大きな音がするといったものなどが挙げられる（以下の事例No. 400, No. 45, No. 318参照）。

No. 400

「あとはね、夜うるさいっていうのは聞いたことがありますよね。南米系の方っていうのは、外で、一般にバーベキューをするんです。結構多いんですよ。それで、ラテン系の、南米系の音楽を流しながらガンガンやっているから、そういうのは聞いたことがありますよね。」

No. 45

「ただ、ほら、ブラジル人っていうのは…、陽気な国だから、まあ、音楽も大きな…あれで、音量で流すんですよね。」

No. 318

「たぶん嫁と姑だったんだと思うんですけど、ケンカするとすごいですよ。ガラス割って、包丁とか持ってくるんですよ。私は一回しか見たことないんですけど。お隣さんは何回も見ているらしくって。「まだだよー」とか言ってたんですけどね。カーッとくるんでしょうね。」
「とにかく夜遅く騒ぐのがすごくて。ここはまだ静かな方だと思うんですけど。大きい音で音楽聴いて…」
「今もそういうことがありますか？」
「ありますね。向こうに住んでいる方も何回も警察に連絡したっていうんで。」
「どんなことで、なんでしょうね。」
「車の…なんていうの、すごく改造した車に乗って、音楽鳴らして、うるさい。」
「中からうるさい感じですかね。」
「そうなんですよ。そこで信号待ちしていても、うちの中までうるさいくらいに響くんですよ。向こうでは普通のことかもしれないですけどね。」

こうした「騒音」を感じた際、ブラジル人に対してそのことを伝えるといった行動を取った事例も、少なからず存在している。

例えば、No. 442の事例では、音がうるさいので、他の場所に移ってもらえないかという提案をしたところ、ブラジル人たちは、その提案を聞いてくれたという経験が語られている。

また、No. 359の事例では、家の近所でブラジル人が主催するイベントがあった際、夜遅くまで終わる気配がなく、うるさいと感じたため、ブラジル人の代表者と直接交渉したと述べられている。その結果、ブラジル人の代表者には、すぐに理解してもらうことができ、イベントもその時点で終了したということである。対象者の男性は、「ブラジル人だからと一概には言えない」との印象を持ったと語っており、ブラジル人と直接会話をすることで、ブラジル人に対する以前の認識が、多少なりとも変わったということがうかがえる。ただ、そうした認識が適用されるのは、一部の指導的立場にあるブラジル人のみであり、多くのブラジル人に対しては、依然としてあまり良い印象は持っていない。

No. 359

「では、外国人との間のトラブルということで、ご自身で経験されたことがありましたらお聞かせください。」

「私個人はありません。個人は無かったのですが、この隣でブラジルの店を出すのね。そこで多くのイベントをやったのだけれど、それだけ外国人がいっぱい来て、10時前だったかな、あまりうるさいので、私が代表者に会わせてほしいとそこに行ったわけです。日本の常識の範囲以内でやってくださいと言ったら、代表者はすぐ分かってくれて、分かりましたと時間でぴたっとやめました。だから話せば分かるところがあるのですよ。代表者がしっかりしていればいいのですよ。ところが、ふざけるな自分達はブラジル人だと開き直ると、トラブルが起きるのですよ。私がある時言ったことはすぐに分かり、ぴたっとやめました。ブラジル人だからと一概には言えないところがあります。そういう人が残ってくれて指導してくれれば、良くなると思うのですが。」

No. 442

「去年なんかはその貸家で、天気の良い日に友達いっぱい呼んでがんがん音楽かけて・・・っていうのはあったね。その隣にはおばあちゃんが一人で住んでいるような状況で。そのときは『近くに公園があるから、あっちでしたら?』っていうのはそういうことは聞いてくれますけどね。」

上記のように、ブラジル人たちに、「音」の問題を訴えたところ、その問題となる行動を止めてくれたという事例がある一方で、以前と変わらず、「音」を出し続けているという事例もまた存在する。No. 24の事例では、音がうるさいと注意しても、全く変わらなかったため、今は直接言わず、警察に電話をするようになったと語っている。

また、No. 73の事例では、町議会議員選挙の応援の際、有権者から、「騒音」の問題を解決してもらえないかと訴えられたと述べており、一部の町民にとっては、もはやこうした問題の解決を、公的機関に依頼せざるを得ないほど切迫した問題となっており、日本人住民とブラジル人住民との関係が悪化している様子がうかがえる。

No. 24

「いえ、ほとんど休みの前っていうのは騒ぎますね。それとか、普段昼間でもひどいです。ここ、警察の方が昼間この前来ていただいたんで、ちょっと静かですけど。もう、あの、向こうの道路まで聞こえます。音楽の音が。よく住んでるねって言うけど、住んでるねって言ったってね、皆さんここに永住していらっしゃる方たちだから。だから、大家さんがもうちょっとしっかりとやっていただくという感じでもっていかないと。」

「大家さんはどこにいらっしゃるんですか?」

「それがわからない。言わないんですよ。私たちもわからないんですよ。」

「私が言うのはまあ、ここは静かでしょって言うんですよ、そしたら、そのように生活をして下さいって言うんですよ。音楽を聴くなどは言いません。イヤホンで聴くとか、もっとボリュームを下げて聴くとか、10時過ぎたらやっぱりみんなね、寝たりするんだから、騒がないとか。で、声も下げるとか。そういう風に言って注意はするんですけど、きかないですね。で、今は言わないで警察にすぐ電話します。」

No. 73

「何か今、外国人に関することで不安に感じることはありませんか?」

「不安かあ。まあやっぱりあれだなあ。今年かなあ。今年の4月に選挙があったんだけどね。町の。町会議員の。その時に西小泉の近くまわったんだけど、あるうちから、外人がものすごく、アパートにたむろしているんで、それが昼も夜も大声で騒いだり、夏なんかバーベキューやったり、車の出入りも激しくて、夜でも昼でも・・・」

「昼夜問わず?」

「うんまあだいたい夜だろうけど。主に夜。もう何時なんかも。もうエンジンかけっぱなしとかエンジンふかしたりとか。なんとかならないか、と。我々も選挙の応援でいったんだけど、したら、『こういうのをやってもらわないと困るんだよなあ』と。」

これだけ関係が悪化した背景には、言葉が通じない、あるいは交流が全くないということによる、恐怖感・不信感が少なからず存在しているように思われる。No. 163の事例では、対象者の夫が、「うるさい」と注意したところ、音はおさまったものの、「あんまり言ってもあとが怖い」との印象を持っている。同様に、No. 162の事例でも、最初はブラジル人に対して、静かにしてもらおうよう伝えていたが、「刺されるから言わない」という人が増えてきたと述べている。ただ、No. 163の対象者自身は、ブラジル人にそのことを伝えるべきだと考えており、ブラジル人に対する伝え方、説明の仕方に問題があるのではないかと指摘している。

No. 163

「最初の印象は悪かったですね。話すぶんには『こんにちは』とかすごくいいんですけど、子どもさんたちが来ると、結局車で夜中に帰ってきて、音楽のボリュームががががががが大きくかけてたりとか、エンジンがかけっぱなしとか、最初のころはよく主人が『うるさい』なんて言って。それで言ったら消してはくれたんですけど、あんまり言ってもあとが怖いみたいのはありましたけどね。」

「結局、大勢人が来て、わやわやしたりとか、今、痴話げんかみたいなのがあると、それがすごいんですよ。大声出したりドアを蹴ったりとかね。見てて怖いんですよ。今入ってるブラジル人さんは神父さんなんですよ。それなんですごく静かになった（笑）。もうすごく穏やかな人ですね。だけどその前はほんと大変でしたね。」

No. 162

「熱い国の人間ですから、夏場で平気に窓開けてデカイ音出したりするわけです。夜中も。さすがに注意をするとやめるんですけど、ただ、彼らは育った環境も僕らと違うので、非常に突発的に怒り出して（聞き取り不能）になる可能性が高いんですよ。それを危惧する住民が非常に増えてきてますね。文句言ったら、何か言われるんじゃないかなって。それなら黙ってよう。」

「騒音にしても。一時は夜中にみんな、1時2時に夜中に騒いだりしてて、その苦情があったりなんかして。ほら、言うとならトラブルになりますから、言わなくなっちゃてるのか。」

「実際にアパート住んでいて、そこで夜中の1時2時まで宴会をやってて、それでうるさいってのは2回くらい聞いたことがあります。最初は言ったんだけど、あんまり言ったら刺されるから言わないって。それは、何故かっていうと、新聞に掲載される、犯罪率が高くなってきましたので、逆に、外人だから余計なこと言うとやられちゃうかなって、防衛をはってるわけですよ。説明をすればいいんですよ。すみませんが、と。こういう時間で私たちは寝てます、と。だからちょっとでいいのでボリューム下げてくれないか、と。だから、何て言うか、その説明の仕方が駄目なんじゃないかって思いますね。それを放っておくと、あ、いいんだってなりますから。言わない方も、僕は問題があるんじゃないかと。ただ警戒をして。僕だったら言いますね。その時に言わないで、後で。その時行くとトラブルになりますから。分かるはずですから。」

このように、ブラジル人の言葉がわからない、あるいは何を考えているかがわからない、といった状況によって、必要以上に恐怖感・不信感が生まれ、それがますます関係を悪化させているという側面が、こうした生活でのトラブルにおいては存在しているように思われる。こうしたことを考えると、日本人とブラジル人との間の住み分けの進展が、日本人住民とブラジル人住民との間に横たわるさまざまなトラブルを解決するわけではないということが言えるだろう。

表3—8 騒音に関するトラブル

NO	年齢 性別	外国人 比率	インタビュー回答
24	60代 女性	10%未満	ほとんど休みの前っていうのは騒ぎますね。それとか、普段昼間でもひどいです。ここ、警察の方が昼間この前来ていただいたんで、ちょっと静かですけど。もう、あの、向こうの道路まで聞こえます。音楽の音が。よく住んでるねっていうけど、住んでるねって言ったってね、皆さんここに永住していらっしゃる方たちだから。だから、大家さんがもうちょっとしっかりとやっていただくという感じでもっていかないよ。
45	60代 男性	20%以上	ただ、ほら、ブラジル人っていうのは…、陽気な国だから、まあ、音楽も大きな…あれで、音量で流すんですよ。
73	60代 男性	10%未満	今年の4月に選挙があったんだけどね。町の。町会議員の。その時に〇〇の近くまわったんだけど、ある家の人から、外人がものすごく、アパートにたむろしているんで、それが昼も夜も大声で騒いだり、夏なんかバーベキューやったり、車の出入りも激しくて、夜でも昼でも…。(昼夜問わず?) うんまあだいたい夜だろうけどね。主に夜。もうエンジンかけっぱなしとか、エンジンふかしたりとか。なんとかならないか、と。
162	50代 男性	10%未満	実際にアパート住んでいて、そこで夜中の1時2時まで宴会をやって、それでうるさいってのは2回くらい聞いたことがあります。最初は言ったんだけど、あんまり言ったら刺されるから言わないって。それは、何故かっていうと、新聞に掲載される、犯罪率が高くなってきましたので、逆に、外人だから余計なこと言々とやられちゃうかなって、防衛をはってるわけですよ。
163	50代 女性	10~20%	最初の印象は悪かったですね。話するぶんには「こんにちは」とかすごくいいんですけど、子どもさんたちが来ると、結局車で夜中に帰ってきて、音楽のボリュームががががががが大きくかけてたりとか、エンジンがかけっぱなしとか、最初のころはよく主人が「うるさい」なんて言って。それで言ったら消してはくれたんですけど、あんまり言ってもあとが怖いみたいのはありましたけどね。
318	30代 女性	10%未満	たぶん嫁と姑だったんだと思うんですけど、ケンカするとすごいんですよ。ガラス割って、包丁とか持ってくるんですよ。私は一回しか見たことないんですけど。お隣さんは何回も見てるらしくって。「まただよー」とか言ってたんですけどね。とにかく夜遅く騒ぐのがすごくて。ここはまだ静かな方だと思うんですけど。大きい音で音楽聴いて。(今もそういうことありますか?) ありますね。向こうに住んでいる方も何回も警察に連絡したっていうんで。
359	70代 男性	10~20%	私個人はありません。個人は無かったのですが、この隣でブラジルの店を出すのね、そこでイベントをやったのだけれど、それだけ外国人がいっぱい来て、10時前だったかな、あまりうるさいので、私が代表者に会わせてほしいとそこに行ったわけです。日本の常識の範囲以内でやってくださいと言ったら、代表者はすぐ分かってくれて、分かりましたと時間でびたっとやめました。だから話せば分かるところがあるんですよ。代表者がしっかりしていればいいんですよ。
400	50代 男性	10~20%	あとはね、夜うるさいっていうのは聞いたことありますよね。南米系の方っていうのは、外で、一般にバーベキューをするんです。結構多いんですよ。それで、ラテン系の、南米系の音楽を流しながらガンガンやっているから、そういうのは聞いたことがありますよね。
442	50代 女性	10~20%	去年なんかはその貸家で、天気の良い日に友達いっぱい呼んでがががん音楽かけて…っていうのはあったね。その隣にはおばあちゃんが一人で住んでいるような状況で。そのときは「近くに公園があるから、あっちでしたら？」っていうのは、そういうことは聞いてくれますけどね。

③交通事故

ブラジル人との間での、車に関するトラブルの話は、多くの人によって語られている。ただ、その多くは、人から伝え聞いたものであり、社会問題として「車のトラブル」の話を認識しているという意味合いが強いように思われる。

例えば、No. 318の事例では、友人が事故の際に、補償が受けられなかったという経験を述べつ

つ、外国人が保険に入らないというシステムの不備を指摘している。こうした語りの中には、単なるトラブルの経験としてだけでなく、今後、外国人も保険に加入するようなシステムを整備すべきだという、社会問題としての視点が含まれているのである。

No. 318

「なんかね、人から聞いたんですけど。ブラジル人の方を受け入れた時に。身元引受人が町長だったって。本当ですかね。」

「初めてお聞きしました。」

「で、ともだちが車をぶつけられて。ブラジル人にね。で、埒が明かないので、役場に問い合わせたらいいんですよ。まあ何も解決はしなかったんですよ。ブラジルの方には、保険に入るっていう習慣がないらしいですよ。だから、ぶつけても逃げたらそこまでっていう。くやしいですよ。」

「じゃあ被害はなにも…」

「なんかこう雇い主の方にも連絡はしたんですけど、『勤務状態が悪いから解雇した』って言われちゃって。誰も責任なんて取ってくれず、と。もちろんこっちに来て保険に入っている人もいるんでしょうけど。あちらには保険のシステムがないそうなので。」

同様に、No. 359の事例でも、外国人の保険加入に関するシステムの問題が語られている。ただ、No. 359は、No. 318と異なり、現状をある程度肯定的に評価している。そこでは、以前は、ブラジル人が乗る車は、車検に入っていないことが多かったが、最近では、ブラジル人が経営する中古車販売会社に指導が入るようになったため、車を買うときに保険にも加入するようなシステムが徐々に整いつつあると述べられている。

No. 359

「今一番困っているのは交通事故ですよ。事故を起こせば居られなくなってしまう。だから、被害者はブラジル人の事故にあったら大変ですよ。最近その辺も厳しくなっているから、日本人から車を買って、もちろん車検のある車を買うのですよ、だけど車検が一ヶ月か2ヶ月しか残っていない車を買う。その後車検を受けなくて乗っていますよ。これはいい方法だと思うのだけれど、今、ブラジル人が車の中古販売を始めまして、そういうところに指導しますからよくなっている部分はありますよね。日本と同じように車を買う時は保険も一緒にというようなシステムをブラジル人の販売会社もやっているようです。そういう点はよくなってきていますかね。」

このように、社会問題として「車のトラブル」が存在するという認識は、多くの人に受け入れられている。そして、その認識は、現状における、ブラジル人の運転マナーの悪さと結びつけて、語られることも多い。例えば、NO. 357では、ブラジル人は車を改造していることが多く、運転も中央分離線を越えて走行するなど、荒い傾向があると述べられている。

No. 358

「そうですね。なんか増えてる感じしますよね。道端で会うっていうか、車を運転してるんですよ。わりと強烈的な運転。(荒い?) たとえばこう、真ん中に中央線あるけど、そこをスコーンって。渋滞とかしてる時にやる方がいらっやいますね。それがすべて外人とは言いませんけど、車の感じでわかりますよね。二世代之前のマークII系統、チューニングして乗るんですよ。あとはホンダ系。二世代之前ですと50万前後で買えると思うんですけど、それを改造して乗るんですよ。」

とはいえ、実際に事故を目撃したと語る人も存在しており、こうした運転マナーの悪さ、交通事故などのトラブルには、ある程度の裏づけがあることはうかがわれる。例えば、No. 403は、実際に事故を間近に目撃し、その後のトラブルの一部始終も直接当事者から聞いた経験を持っている。しかしながら、本人も語っているように、こうした事故に関する情報は、No. 403を介してさらに人に伝わっている。このようにして、ブラジル人の運転マナー、交通事故という言説が、「社会問題」化され、増幅されている可能性は否定できない。

No. 403

「ご自身でトラブルを経験したことがありますかという質問なんですけど、そういう経験はありましたか。」
「俺自身はないです。」
「そういったトラブルを、誰かから聞いたという話がありましたら。」
「〇〇に住んでいた時なのですが、自分の家の隣の家へ、事故で飛び込んできたのですよ。」
「お隣の家に車が飛び込んできた。」
「ええそうです。それでその人達は逃げてしまったわけですが、車を置いて…お巡りさんが来たんですけど、結局事故を起こしたのは若い人だと思うので、そうかなと思ったのだけど、迷惑というかトラブルというか、感じたのはそのくらいですね。だからその当時は、逃げちゃうのかなっていうのが、だからブラジルの人と事故を起こさない方がいいよというような話は聞いたり、言ったりしたことはあります。」
「〇〇に住んでいた頃といいますと、何年くらい前でしょうかね。」
「やはり6年7年前です。」

No. 45

「特に、あの一、一番いま気を付けているのが、交通事故ですよ。」
「あー。この辺、結構道…。」
「そうそう、狭いでしょ。」
「はい。」
「だから、彼らはね、ほら、日本は、だいたい、皆さん保険入ってるけど。」
「はい。」
「彼らは、事故起こすと、そのまま車おいて逃げちゃうって。」
「あー、そうなんですか。」
「ある人なんか・・・、浜松まで、その金を取りに行っちゃって言ってました。」
「へー。それは、見つけたしたもの、すごいですね。」

No. 162

「もう一つは車が増えてるでしょ。今、任意の保険に入っていない人多いんですよ。で、泣き寝入りしてる人がほとんどなんですよ、ぶつけられて。保険もおらないで。そういう人達がうんと目立ってるんですよ、それはやっぱり郷に入った仕方、彼達もいけない。そういう条例をちゃんとすればいいんですよ、条例として。そういう条例化するのを、この所に住むためにはみんながこういうルールを守って、こうやって、いい所に住もうよって目的のために作ってるんだから、浸透させればいくらでもできるわけです。」

本節では、調査対象者の語りから、外国人との間に発生するトラブルの内容を検討してきた。

初めに、「ゴミ問題」に関しては、まず、地域差が非常に大きいことが確認された。ゴミの問題が、まったく「問題」として認識されていない場合も存在するのに対して、外国人の居住比率が高い地域では、ゴミの収集所を分けるなどの対応を行っているような場合も存在した。また、個人にかかる負担も、かなり偏りが生じている様子が見えてくる。日本人でも、分別をせずに、自分勝手

に捨てていく人がいると語られる一方、行政区の区長や衛生委員に負担が集中しており、そのことを心配する声も聞かれる。こうした負担の地域差や個人差の存在が、ゴミ問題に対する不満を高める要因となっていることも否定できないだろう。ただ、以前よりマナーが良くなったとの指摘もいくつかされており、ゴミに関する問題が若干改善されつつあるという傾向もうかがえる。

次に、「騒音問題」に関しては、やはり個人差が非常に大きい問題であると言える。音が気になるというのは、ある程度主観に左右される。このため、気にならない人にとっては、まったく問題とは感じられないが、逆に気になる人にとっては、耐え難い問題として認識されるのである。こうした問題の根本的な解決は難しいが、日本人と外国人との間の、不交流・相互不干渉が、不信感、恐怖感を増幅させているという側面があることは指摘できるだろう。

最後に、「交通事故」の問題に関しては、人からの経験談や、交通マナーや運転の荒さという事象によって、その恐怖感などが増幅されてはいるものの、基本的に、外国人との間のトラブルというよりは、システムの問題であるという傾向が強い。ある調査対象者が、ブラジル人が経営する中古車販売会社などへの行政指導によって、保険の未加入といった問題は、徐々に「よくなっている」と述べているように、行政機関などによる適切な対応によって、今後、問題が解消していく可能性は高いように思われる。

このように、外国人との間のトラブルに関する語りを検討してみると、トラブルの原因となる実際の問題と、人からの伝聞、および自らの意識・感情による「問題」が相互不可分の関係で存在していることがわかる。トラブルの原因となる問題は、もちろん解決が図られなければならないが、こうした住民の意識もまた、独自に検討されるべき問題である。そこで、第3節以降では、アンケート調査の結果に基づき、日本人住民が持つ意識を総体として明らかにしていくことにする。

表3—9 交通事故に関するトラブル

NO	年齢 性別	外国人 比率	インタビュー回答
45	60代 男性	20%以上	特に、あの一、一番いま気を付けているのが、交通事故ですよ。(この辺、結構道…) そうそう、狭いでしょ。だから、彼らはね、ほら、日本は、だいたい皆さん保険入ってるけど、彼らは、事故起こすと、そのまんま車おいて逃げちゃうって。ある人なんか…、浜松まで、その金を取りに行っちゃって言っていました。
162	50代 男性	10%未満	もう一つは車が増えてるでしょ。今、任意の保険に入ってる人多いんですよ。で、泣き寝入りしてる人がほとんどなんですよ、ぶつけられて。保険もおりないで。そういう人達がうんと目立ってるんですよ、それはやっぱり郷に入った仕方で、彼達もいけない。そういう条例をちゃんとすればいいんですよ、条例として。そういう条例化するのを、この所に住むためにはみんながこういうルールを守っていかうよって、いい所に住もうよって目的のために作ってるんだから、浸透させればいくらでもできるわけです。
163	50代 女性	10~20%	最初の印象は悪かったですね。話すぶんには「こんにちは」とかすごくいいんですけど、子どもさんたちが来ると、結局車で夜中に帰ってきて、音楽のボリュームがかんがかん大きくかけてたりとか、エンジンがかければなしとか、最初のころはよく主人が「うるさい」なんて言って。それで言ったら消してはくれたんですけど、あんまり言ってもあとが怖いみたいのはありましたけどね。
318	30代 女性	10%未満	で、ともだちが車をぶつけられて。ブラジル人にね。で、埒が明かないので、役場に問い合わせたらしいんですよ。まあ何も解決はしなかったんですよ。ブラジルの方には、保険に入るって習慣がないらしいんですよ。だから、ぶつけても逃げたらそこまでって言う。くやしいですよ。(じゃあ被害はなにも?) なんかこう雇い主の方にも連絡はしたんですけど、「勤務状態が悪いから解雇した」って言われちゃって。誰も責任なんて取ってくれず、と。もちろんこっちに来て保険に入っている人もいるんでしょうけど。あちらには保険のシステムがないようなので。
358	30代 男性	10~20%	そうですね。なんか増えてる感じしますよね。道端で会うっていうか、車を運転してるんですよ。わりと強烈な運転。(荒い?) たとえばこう、真ん中に中央線あるけど、そこをスコーンって。渋滞とかしてる時にやる方がいらっしやいますね。それがすべて外人とは言いませんけど、車の感じでわかりますよね。二世代之前のマークII系統、チューニングして乗るんですよ。
359	70代 男性	10~20%	今一番困っているのは交通事故ですよ。事故を起こせば居られなくなってしまいます。だから、被害者はブラジル人の事故にあったら大変ですよ。最近その辺も厳しくなっているから、日本人から車を買って、もちろん車検のある車を買うのですよ、だけど車検が1ヶ月か2ヶ月しか残っていない車を買う。その後車検を受けないで乗っていますよ。これはいい方法だと思うのだけれど、今、ブラジル人が車の中古販売を始めまして、そういうところに指導しますからよくなっている部分はありますよね。日本と同じように車を買う時は保険も一緒にというようなシステムをブラジル人の販売会社もやっているようです。そういう点はよくなってきていますかね。
403	60代 男性	10~20%	〇〇に住んでいた時なのですが、自分の家の隣の家へ、事故で飛び込んできたのですよ。(お隣の家に車が飛び込んできた。) ええそうです。それでその人達は逃げてしまったわけです、車を置いて…お巡りさんが来たのですけど、結局事故を起こしたのは若い人だと思うので、そうかなと思ったのだけど、迷惑というかトラブルというか、感じたのはそのくらいですね。だからその当時は、逃げちゃうのかなっていうのが…。だからブラジルの人と事故を起こさない方がいいよという話は聞いたり、言ったりしたことはあります。

第3節 外国人に対する意識

大泉町の町民たちは、周囲の外国人たちに対して、どのような意識を持っているのだろうか。

まず、近隣の外国人が、地域における行政区活動に参加しているかどうかを調べてみた。その結果、「あまり参加していない」とする回答がもっとも多く、45.0%を占め、さらに、「まったく参加していない」とする回答も27.8%に達していた。このように、町民たちは、近隣に居住する外国人は、行政区の活動などに、あまり参加をしていないという認識を持っている。

その上で、外国人も行政区活動や行事に参加すべきかどうかについて尋ねてみたところ、およそ5割の人が、「積極的に参加した方がよい」、あるいは「ある程度参加した方がよい」と答える一方、「外国人の意志にまかせる」という回答も約4割を占めている（表3-10）。行政区に加入していない外国人への対応を聞いた同様の質問においても、「行政区に加入すべきだ」という回答が約5割を占める一方、「個人の意志にまかせるべきだ」とする回答も約4割程度存在している（表3-11）。

このように、外国人が行政区に加入したり、活動に参加をすること自体は賛成であり、望ましいことであると考えながらも、加入や活動への参加の際、こちらから特にアプローチをすることはせず、向こう（外国人）側に任せるといった意識がかいま見える結果となっている。

ただ、1999年に実施した調査と比べると、その意識には若干の変化が見られる。1999年調査では、外国人も「行政区に加入すべきだ」とする回答は42.1%にとどまっていたが、2005年調査では、その割合は、50.0%にまで上昇している。逆に、行政区への加入は「外国人の意思にまかせるべきだ」とする回答は、1999年調査での45.5%から、2005年調査では、40.9%まで減少している。

表3-10 外国人は行政区活動・行事に参加すべきか

	積極的に参加した方がよい	ある程度参加した方がよい	外国人の意思にまかせる	参加して欲しくない	無回答	合計
2005年	112 20.7%	156 28.9%	225 41.7%	31 5.7%	16 3.0%	540 100.0%
1999年	87 18.7%	119 25.5%	215 46.1%	24 5.2%	21 4.5%	466 100.0%

表3-11 行政区に加入していない外国人について

	行政区に加入すべきだ	行政区に加入する必要はない	行政区に加入して欲しくない	個人の意志にまかせるべきだ	無回答	合計
2005年	270 50.0%	15 2.8%	26 4.8%	221 40.9%	8 1.5%	540 100.0%
1999年	198 42.1%	24 5.1%	12 2.6%	214 45.5%	22 4.7%	470 100.0%

この結果を見ると、外国人も、地域社会の一員として、諸活動に参加して欲しいという意識は以前より強くなっていると言える。それは、外国人という存在が、より「当たり前」の存在になりつつあり、ある程度の義務を伴う形で、コミュニティの一部を担って欲しいという意識の現れであるとも言えるだろう。

こうした意識は、一方で、外国人が保持している文化に対して、ある種の寛容性を示している。

外国人の子どもは、日本の公立学校、ブラジル人学校のどちらに通うべきか、ということについて尋ねた質問で、「日本の学校に通った方がよい」と答えた人の割合は、23.7%にとどまっている

のに対し、「外国人の選択にまかせるべき」だとする回答は、70.7%に達している（表3-12）。

この割合は、1999年に実施した調査と比べても増加している。1999年調査では、「外国人の選択にまかせるべき」とする回答は、62.4%であった（表3-13）。こうした結果には、1999年調査の段階では、ブラジル人学校の存在が、広く一般には認知されておらず、日本の公立学校の代替的教育施設として捉えられていなかったという事情も少なからず影響を与えているように思われる。

表3-12 外国人の子どもの教育について（2005年調査）

	日本の学校に通った方がよい	外国人学校に通った方がよい	外国人の選択にまかせるべき	親子が望むなら学校に通わなくてもよい	無回答	合計
実数	128	18	382	5	7	540
構成比	23.7%	3.3%	70.7%	0.9%	1.3%	100.0%

表3-13 外国人の子どもの教育について（1999年調査、複数回答）

	日本の学校に通った方がよい	外国人学校に通った方がよい	外国人の選択にまかせるべき	親子が望むなら学校に通わなくてもよい	無回答	データ数
実数	137	20	290	8	13	465
構成比	29.5%	4.3%	62.4%	1.7%	2.8%	100.0%

しかしながら、行政区活動などに代表される公的な領域における活動、すなわち必要最低限の義務的活動については、外国人に対しても、積極的な参加を求める一方、私的な領域における活動については、相互不干渉を貫き、住み分けを容認するような意識のあらわれであると読みとることもできるだろう。

実際、子どもが通う学校に対しては「外国人の意思にまかせるべき」だと答えながらも、外国人は「日本語を使うべきだ」とする人が、約半数（48.9%）を占めており、「外国人の言葉を尊重すべきだ」とする回答の割合を（27.2%）上回っている（表3-14）。このように、日本人住民にとって、まったく影響のない領域、および活動（ブラジル人学校など）において、独自の文化・活動を容認する一方で、自分たちの領域・活動と接点を持つ場面においては、外国人住民に対して譲歩を要求し、協調行動を求めるという意識が見られるのである。

表3-14 外国人が使う言葉について

	日本語を使うべきだ	外国人の言葉を尊重すべきだ	日本人も外国語を学ぶべきだ	無回答	合計
実数	264	147	110	19	540
構成比	48.9%	27.2%	20.4%	3.5%	100.0%

上記のように、大泉町の日本人住民たちは、外国人住民に対し、以前よりも行政区活動などへの積極的な参加を求めるようになってきている。その一方、独自の文化や言語の保持に関しては、ある程度寛容な態度をとっている。一見すると、相反するような、こうした対応はどのようなことを意味しているのだろうか。

行政区活動などの公的な領域へ、外国人の参加を求めるようになったということは、今まで、

「お客さん」であった外国人を定住者と見なし、地域社会の一員として、義務や責任を担ってほしいという意識の現れであるとも見ることが出来る。

ただ、先に見たように、大泉町の中でも、行政区によっては、外国人と日本人で、ゴミ収集所を別にするなど、公的な制度などに関しても、住み分けをすすめるような動きが、既にいくつか存在している。このように公的な領域でも「住み分け」が進行する上での、過渡期に現状は位置しているのだろうか。

以下の第4節では、将来における外国人との交流に関する、日本人住民の意識を見ることにする。

第4節 外国人との今後の交流について

今後、外国人と、積極的に交流を図っていききたいと考えている人の数は、それほど多くはない。「これまで同様、積極的に交流していききたい」、あるいは「今後は積極的に交流していききたい」と考えている人の割合は、あわせて6.7%に過ぎない(表3-15)。

一方、それほど、積極的に交流しようという意思を持たず、ある程度の交流にとどめたいと考えている人は多い。「これまで同様ある程度交流していききたい」、「今後はある程度の交流にとどめたい」という人は、あわせて55.7%にものぼっている。さらに、「これまで同様交流していかない」、「今後は交流していかない」という、今後の交流に関して、完全に否定的な考えを持つ人も、33.9%と、ある程度存在している。

表3-15 外国人との交流に関する今後の希望

	実数	構成比
これまで同様積極的に交流したい	9	1.7%
今後は積極的に交流したい	27	5.0%
これまで同様ある程度交流したい	193	35.7%
今後はある程度の交流にとどめる	108	20.0%
これまで同様交流しない	164	30.4%
今後は交流しない	19	3.5%
無回答	20	3.7%
合計	540	100.0%

表3-16 外国人との交流に関する今後の希望 (1999年調査)

	実数	構成比
これまで同様積極的に交流したい	7	1.5%
今後は積極的に交流したい	39	8.4%
これまで同様ある程度交流したい	107	23.0%
今後はある程度の交流にとどめる	46	9.9%
これまで同様交流しない	63	13.5%
今後は交流しない	5	1.1%
今のままでよい	178	38.3%
無回答	20	4.3%

このように、今後の交流に関しては、多くの人々が、否定的に考えていることがわかる。この傾向は、1999年の調査と比べても顕著になっている。1999年調査では、「これまで同様積極的に交流

していきたい」、「今後は積極的に交流していきたい」という積極的な回答をした人の割合は、全体の9.9%であった。しかし、2005年調査では、その割合は、6.5%まで低下している（表3-16）。

また、年齢別に見ると、年齢が高くなるほど、今後の交流に対して否定的な考えを持つ人の割合が高くなっている（表3-17）。先に見たように、60代以上というのは、普段、外国人ともっとも交流を多く持っている年代であった。しかしながら、今後の交流に対しても積極的というわけではなく、むしろ最も否定的な立場をとっているのである。

表3-17 年齢世代×今後の交流

		今後の外国人との交流					合計
		これまで同様積極的に	今後は積極的に	今後はある程度にとどめる	これまで同様交流しない	今後は交流しない	
年齢世代	20・30代	2 1.6%	11 8.8%	61 48.8%	19 15.2%	32 25.6%	125 100.0%
	40・50代	3 1.5%	9 4.4%	78 37.9%	46 22.3%	70 34.0%	206 100.0%
	60代以上	4 2.5%	7 4.3%	53 32.7%	42 25.9%	56 34.6%	162 100.0%
合計		9 1.8%	27 5.5%	192 38.9%	107 21.7%	158 32.0%	512 100.0%

P=.065 (χ^2 二乗検定)

こうした結果を説明する原因としては、年齢が高い人ほど、今後の外国人との「交流」を、より現実的なものとして捉えていた、という可能性を挙げることができる。若い世代の人々、特に20・30代の人々にとって、地域における外国人との接触の機会はそれほど多くはない。それゆえ今後の「交流」が、あくまでも抽象的な問題として捉えられており、その明確なイメージが持たれていないということが考えられる。一方、60代以上の人にとっては、日頃外国人と接する機会が多いため、今後の「交流」についても、より具体的な問題として捉えられているという可能性があるのである。

また、このような結果を見ると、地域において外国人と接する機会が多い60代以上の人々にとって、外国人住民との交流は、自発的・積極的になされたわけではなく、単に必要な迫られたから、外国人との接触・交流が行われたという側面は否定できない。

では、日本人住民たちは、こういった要素が、交流を妨げていると考えているのだろうか。外国人と交流をする上で難しく感じることを尋ねてみたところ、言葉の問題という回答がもっとも多い(68.5%)という結果であった(表3-18)。しかしながら、1999年調査と比較してみると、「生活習慣の違い」という回答が、1999年調査では、40.9%だったのに対して、2005年調査では、53.7%にまで増加している(表3-19)。その一方、「外国人と出会う機会がない」という回答は、1999年調査の30.3%から、2005年には、18.1%まで低下している。

表3-18 交流をする上で難しく感じること(複数回答)

	度数	構成比
言葉の問題	352	68.5%
生活習慣の違い	276	53.7%
外国人に関する知識がない	80	15.6%
時間的余裕がない	98	19.1%
外国人と出会う機会がない	93	18.1%
外国人に対して関心がない	60	11.7%
ケース数	514	100.0%

表3-19 交流をする上で難しく感じること（1999年調査、複数回答）

	実数	構成比
言葉の問題	323	69.5%
生活習慣の違い	190	40.9%
外国人に対して持っているイメージ	40	8.6%
外国人に関する知識がない	70	15.1%
時間的余裕がない	7	1.5%
外国人と出会う機会がない	141	30.3%
外国人に対して関心がない	88	18.9%
ケース数	465	100.0%

このように、多くの日本人住民にとって、「言葉の問題」、あるいは「生活習慣の違い」が交流を進めるための大きな障害になっていると認識されている。

もちろん、そうした問題の外に存在する、外国人に対する感情的な拒否反応も無視することはできない。No. 24やNo. 402のような語りの背景には、もともと静かな町であった大泉に、外国人が流入し、そのことで、本来の生活が脅かされているという現状認識が存在している。No. 402自身が語っているように、変化自体に対する拒否反応が少なからず存在しているのである。

No. 24

ええ、だから、私なんかもう、やっぱり、もうちょっと住みやすい町になればなあと思ってますよね。そのためにはやはり、同じ日本に来られたんだから、やはり日本のいいところも見て、やっぱりこの周り静かなんですよ。ホントに静かなんですよ。だから、そういう風に生活をしていただければいいと私たちは望んでるんですよ。

No. 402

「わたしは、個人的にはね、ブラジルの方が減って行って、また、元の静かな町になればいいなあと思ってますけどね。」

「年寄りみんな反対だからね、基本的にはね（笑）。未知に対して、チャレンジするんじゃなくて、未知に対して逃げるからね、やっぱり年寄りはね。」

このように、大泉町の町民たちは、今後の外国人との交流に対して、総じてあまり積極的ではないと言える。特に、年齢層が高い人は、その傾向が強い。一方、年齢が若い世代の人たちは、相対的に見れば、外国人との交流に対して積極的だとは言えるものの、外国人との間の、実際の接触や交流は少なく、外国人との交流ということ自体が、現実的なものとして捉えられていないという可能性がある。

こうした状況の中、今後、大泉町は、どのような社会を目指していくことになるのだろうか。ここで、再び、第3節の結末で提示された問題に立ち返ることになる。すなわち、外国人と日本人が「住み分け」が進んだ状態になるのか、それとも、日本人と外国人との交流を保ちつつ、共に生活をしていくような社会になるのかという問題である。

第4章では、大泉町の町民が持つ「大泉町」についての意識や要望を明らかにすると共に、今後目指すべき「共生」社会の内容を、面接調査の語りを用いながら、考察することにする。

（濱田国佑）